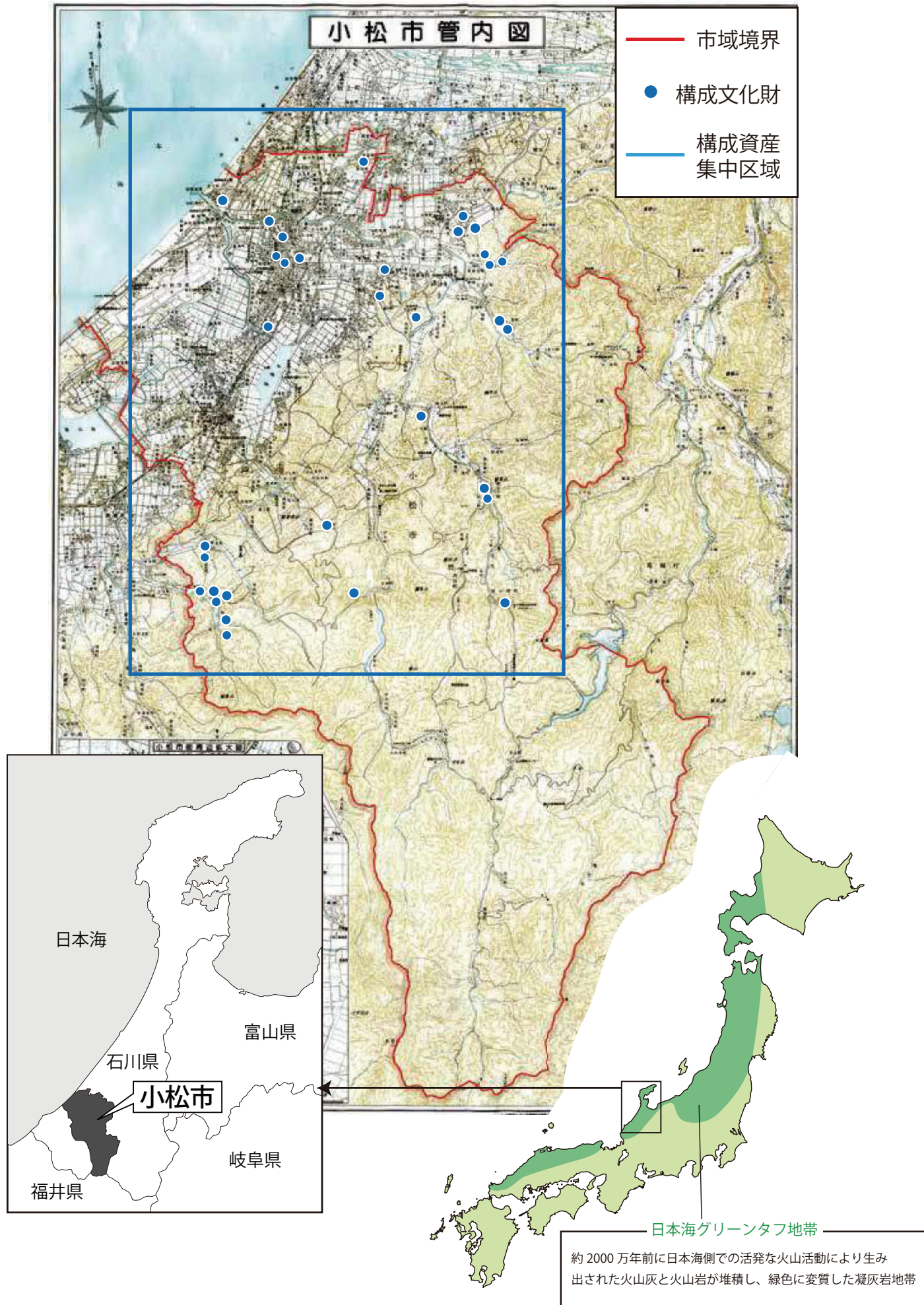


① 申請者	小松市	② タイプ	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">地域型</div> / シリアル型 A   B   C   D <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">E</span>	
③ タイトル				
『 <sup>しゅぎょく</sup> 珠玉 と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～				
④ ストーリーの概要（200字程度）				
<p>小松の人々は、弥生時代の<sup>へきぎょく</sup>碧玉の玉づくりを始まりとして2300年にわたり、金や銅の鉱石、メノウ、オパール、水晶、碧玉の宝石群、良質の凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石などの石の資源を見出し、時代のニーズに応じて、現代の技術をもってしても再現が困難な高度な加工技術を磨き上げ、ヤマト王権の諸王たちが権威の象徴として挙げて求めるなど、人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきている。</p>				
				
八日市地方遺跡の玉づくり			滝ヶ原石切り場（上） とアーチ型石橋（下）	
⑤担当者連絡先				
担当者氏名				
電 話		FAX		
E-mail				
住 所				

市町村の位置図 (地図等)



構成文化財の位置図 (地図等)



- 石材・鉱物産地
- 制作・工房関連地
- 代表的石造建造物 (市内に点在)
- 天然記念物・風景地
- ★ 構成文化財保管施設 (文化財所在地設置の保管施設を除く)

## ストーリー

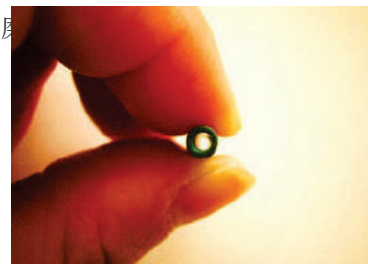
## 弥生時代の王たちを魅了した小松の「碧玉」アクセサリー



1717年、鹿ヶ原で産出される碧玉を原料に、八日市地方で「玉づくり」

八日市地方遺跡出土碧玉製管玉（国重要文化財）

今から2300年前の弥生時代、日本では自然や生命、権力への象徴として「緑」への憧れが強く、朝鮮半島から伝わった「緑の玉」の国産化を目指し、原石産地探しが始まる。良質で豊富な碧玉が採取できたのは小松を含め全国で4ヶ所に限られ、特に小松の碧玉は、きめ細かさや埋蔵量で他に秀でていた。小松の弥生人は、那谷・菩な た ぼを開始する。それまでの軟質の緑色凝灰岩による管玉くだたま製作から、硬質で加工が困難な碧玉での管玉製作を可能とする当時の最先端加工技術であり、小松で実現したその工程は碧玉を石鋸いしのこで方形柱に切断していき、砥石ともしで擦って円柱に磨上げたものを、太さ0.7mmのメノウ製石針で1mmの孔を開け、直径2mmの細くて精巧な管玉を作り上げるものであった。現代でも復刻困難な驚異的な加工技術によって作られた管玉は、糸魚川産ヒスイを加工した勾玉と組み合わせた首飾りや頭飾りとして、日本海沿岸交易を経て九州へと届けられ、弥生の王たちを魅了した。その後、八日市の玉づくり技術は、さらに東の碧玉産地へと伝わっていくのである。



直径2ミリの碧玉に石の針で1ミリの孔を開ける

## 古墳時代に日本を席卷する腕飾りの誕生と中世に花開いた「小松の凝灰岩文化」

古墳時代前期、ヤマトに強大な勢力が誕生し、新たに大型の装身具として石製の腕輪生産が始まると、加工しやすくきめ細かな石質を持つ小松の緑色凝灰岩が注目を集める。精巧な彫刻加工を施したデザイン性の高さに優れた鋏形石くわがたいしなどの腕輪は、当時のヤマト王権の諸王がステータスシンボルとして挙げて求め、日本各地へと広まっていく。



河田山古墳群の横穴式石室

古墳時代後半には、新たに建築部材として石材の活用が始まる。小松市東部の里山には良質の凝灰岩が広範囲に分布し、これを切り出し加工する技術が小松へ導入され、大型古墳の横穴式石室に使用された。特に、河田山古墳群こうだやまでは、飛鳥時代のアーチ式天井を持つ切石積み横穴式石室が発見され、石積みのズレを防止する鍵手積み技法など国内最先端の石室構築技術を有していた。天井部がアーチ構造の横穴式石室は国内唯一であり、朝鮮半島の百済王墓との類似性から、大陸との繋がりの中で直接、小松に伝わったものと推察される。

古代まで、王の墓や国の建築物など、特別な建造物の建築部材利用が主であった切石技術は、中世に入ると鉄製の石工道具の進化と普及により、行火あんかや囲炉裏、井戸杵、火鉢等の生活道具のほか、灯籠とうろうや石仏等の信仰具、五輪塔等の様々な石塔など、細かな細工を施す石造彫刻品の制作も活発となり、生活・信仰・文化に密着した石の利用が浸透していく。材質の堅牢さと耐火性、錆びない、腐らない石の素材特性は、庶民に広く受け入れられ、材料調達の手軽さもあり、小松の凝灰岩文化が花開いた時代であった。

## 利常公の城の整備とまちづくり、近世の石切り場開発

小松のまちづくりは、江戸初期に加賀前田家三代利常公が隠居し、小松に居を構えたことに始まる。利常公は加賀一向一揆の拠点城の小松城を大規模改修し、石垣で区画された城内には多くの水堀と島を配置する浮城の景観を持つ名城として生まれ変わらせた。利常公の城づくりへのこだわりは本丸やぐらだい櫓台の石垣にも表現されている。当期に新技法として定着し始めた「切込み接ぎ」を採用し、色調の異なる石材をランダムに配置するなどデザイン性豊かな石垣構築を



小松城本丸櫓台の石垣

行うとともに、城内や町家を区画する堀や河川の護岸、橋台にも使用されている。小松城の石垣は『前田家文書』に<sup>うがわ</sup>鵜川石の記載があり、<sup>かけはしがわ</sup>梯川流域に位置する鵜川地区に石切り場を設け、河川で城やまちなかへと運び込んだことがうかがえる。

利常公以降、近世のまちづくりが本格化する中、建築部材としての石材需要が高まり、市内では本格的な石切り場の開発が始まる。現在、確認される25ヶ所以上の石切り場の多くは当期に開かれ、色調や硬さなど細部の特質により使い分けがなされ、門や塀、土台の建築部材や庭の石造彫刻物、信仰用具、生活用具として利用され、石工技術が定着していく。

## もう一つの石の物語「ジャパネクタニを生んだ陶石と地域経済を支えた豊かな鉱石・宝石群」

明治期に欧米でジャパネクタニと称賛された九谷焼には、江戸前期に花坂地区で発見された陶石が用いられている。この陶石もまた、地下の<sup>りゅうもんがん</sup>流紋岩が熱水作用によって風化した産物であり、小松は全国有数の陶石産出地である。陶石粉碎から九谷焼陶土ができるまでの昔ながらの各工程が今も残り伝えられている。



また、江戸後期から<sup>かなひら</sup>金平や<sup>おごや</sup>尾小屋、<sup>ゆうせんじ</sup>遊泉寺で金・銅の採掘が確認され、<sup>かながら</sup>昔ながらの技法を受け継ぐ九谷焼製土場注目を浴びる。特に明治期以降は、尾小屋、遊泉寺の鉱山で銅の産出量が拡大し、大正には全国有数の産出量を誇った。その財は小松だけでなく、明治維新後の加賀百万石の経済をも支えた。

そして、同時期、かつて碧玉で国内を席卷した菩提・那谷のメノウやオパール、そして遊泉寺の紫水晶は「加賀紫」として珍重され、海外への献上品や宝飾品として高く取引された。小松の石資源の豊かさは鉱石、宝石へと広がりを見せ、今でも産出地の個人宅の門塀や、開創1300年の古刹、<sup>なたでら</sup>那谷寺の白く露出した岩山には碧玉の層が見られるほか、境内の庭石や飛び石などに地元産出の様々な宝石群が使われ、市民生活の中に深く溶け込んだ町の姿を見ることができる。



碧玉の層も見られる那谷寺の奇岩遊仙峽

## 現代に残る石の町並み



観音下石を使用した日本酒醸造の石蔵

近世に開かれた数多くの石切り場のうち、特に水に強く青白い色調が美しい滝ヶ原石や、温もりのある黄色の色調で湿気に強い<sup>かながそ</sup>観音下石は、現在でも切り出しが行われる人気石材で、市内の建造物はもちろん、国会議事堂や甲子園会館など、数々の有名建築物に使われその魅力を伝えている。市内中心部を歩くと趣のある小松町家の町並みに多くの石蔵が残っている。小松町家に石蔵が定着した背景には、昭和初期の二度にわたる大火があった。大火で多くの家屋が焼失する中、耐火性に優れた凝灰岩を壁に使った蔵の大半は焼け残ったことが石蔵を再認識するきっかけとなった。

また、滝ヶ原地区には、明治から昭和初期に築造されたアーチ型石橋が、かつて12橋存在し、今でも6橋残されている。現存する石橋が多数存在する地域は、九州以外では当地のみであり、地域が石とともに育んできた「石の里」の風景を今に残している。この滝ヶ原の旧の石切り場跡では、巨大な石塊を様々な石工道具で丹念に切り出した際の紋様が天井や壁に残り、洞窟を支える石柱と相まって幻想的な空間を醸成している。遊泉寺町や鵜川町の石切り場は、良質の石材を求め<sup>ずいどう</sup>隧道状に送路のように掘り進められた姿が特徴的であり、特に遊泉寺の石切り場跡は、総延長10km、広さ8000㎡に及ぶ巨大地下空間となっており、随所に溜まった地下水が例えようもなく美しい光景を作り出している。



幻想的な石切り場跡（滝ヶ原）

このように、2300年にわたり、小松の人々は大地の恵みである石の資源を見出し、時代のニーズに応じて進化してきた様々な技術、知識を磨き上げ、人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきているのである。

## ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	な た ぼだい 那谷・菩提・滝ヶ原 へきぎよく 碧玉産地	未指定 (天然記念物)	弥生時代の王たちを魅了した碧玉製管玉の原石産地。良質の緑色凝灰岩の産地でもあり、弥生時代から古墳時代にかけて、当地の地下資源が古代の装身具を支えた。	
②	ようかいちじかたいせき 八日市地方遺跡 出土品	国重文 (考古資料)	弥生時代の王たちを魅了した碧玉製管玉、管玉加工途中の工程品、管玉製作工具などの一式が出土する玉つくり関係遺物が出土する。これら玉つくり関係の出土品を含め、東西交流の結節点と言える八日市地方遺跡出土品が、小松市埋蔵文化財センターにて収蔵展示されている。	
③	ようかいちじかたいせき 八日市地方遺跡	未指定 (史跡)	碧玉製管玉を製作した玉つくり遺跡であり、北陸最大の弥生中期の拠点集落遺跡。東西のヒト・モノ・ワザが行き交う交流の結節点と位置付けられる遺跡で、碧玉・翡翠など日本海を行き交う宝石の流通拠点でもある。遺跡の一部が「ひととものづくり科学館」の地下に保存されている。	
④	かたやまづたまつくりいせき 片山津玉造遺跡 出土品	未指定 (考古資料)	古墳時代前期に小松の緑色凝灰岩で鋏形石などの腕輪や管玉、勾玉製作を行った加賀市に所在する玉つくり遺跡の出土品。玉つくり工程を示す資料が多く、生産工程を知ることができる。小松市立博物館に収蔵され、見学することができる。	
⑤	こうだやまこふんぐん せきしつ 河田山古墳群の石室	未指定 (史跡公園)	河田山古墳群には飛鳥時代に位置づけられる方墳2基が確認されており、そのいずれもが地元の凝灰岩を使用した切石積み横穴式石室をもつ。天井部が欠損するが、一部天井部へ移行する部分がアーチ状を呈しており、アーチ天井を持つ石室と評価されている。河田山古墳群史跡資料館内に1基が移築復元展示、もう1基は史跡公園内に移設され墳丘復元が行われる。	
⑥	こうだやまこふんぐん 河田山古墳群出土品	未指定 (考古資料)	古墳時代前期・中期と飛鳥時代に位置づけられる河田山古墳の出土資料。管玉や勾玉などの装身具をはじめ、石室古墳より出土した遺物も、河田山古墳群史跡資料館にて収蔵展示されている。	

⑦	じゅくどうやまいせき 十九堂山遺跡石塔群	未指定 (建造物)	古代白鳳期から平安期の古代寺院跡に重複する中世墓群。現在は墓地のため、石塔群があった元の位置から移動しているが、五輪塔や宝篋印塔など、中世に位置づけられる石塔類を複数見ることができる。地元石材を使用している。
⑧	ほとけごぜんはか 仏御前墓	市指定 (建造物)	『平家物語』に登場する白拍子「仏御前」の墓とされる地元の原石を使用した石造物。中世のものと言われ、小松市原町内に所在の仏御前の屋敷跡地内に建てられている。
⑨	たきはらせきぞうたそうとう 滝ヶ原石造多層塔	市指定 (建造物)	14世紀に建立されたと推察される高さ225cmを測る大型の石塔。五層の屋根をもち、塔頂部を欠損する。地元滝ヶ原石を用いた最古の石塔例であり、滝ヶ原下村八幡神社境内に所在する。
⑩	たきはらしもむらはちまんじんじゃ 滝ヶ原下村八幡神社 いせき 遺跡	未指定 (史跡)	神社左側に2基の石窟(やぐら)が開口露出する。1基には石塔が並び、背面に梵字が刻まれる。石材は滝ヶ原産と言われ、13世紀から14世紀と推察される。
⑪	かながそはくさんじんじゃけいだい 観音下白山神社境内 いせき 遺跡	未指定 (史跡)	神社左側に石窟(やぐら)が1基開口露出し、内部には石塔が散在する。石材は観音下石と言われ、中世に位置づけられる。
⑫	こまつじょうほんまるやぐらだいしがき 小松城本丸櫓台石垣	市指定 (建造物)	加賀前田家三代利常公が江戸初期に整備した小松城の石垣。割石を丁寧に面取り加工し隙間なく積み上げる切込み接ぎ工法であり、地元の凝灰岩「鶴川石」と金沢の安山岩「戸室石」などをモザイク状に組み合わせ構築する。
⑬	こまつじょうほんまるにしがわいしがき 小松城本丸西側石垣	未指定 (建造物)	本丸櫓台石垣とともに小松城のなかで現地遺存する数少ない石垣。本丸西側の堀を護岸する石垣で、地元の鶴川石を使用される。
⑭	うかわいしきば 鶴川石切り場	未指定 (産業遺産)	古代から近世(小松城の石垣)、そして近代建築物にまで長い時代にわたって多用されてきた角礫凝灰岩石材の産地。大規模な洞窟工場1ヶ所は、ハニベ岩窟院として観光地となっている。
⑮	ゆうせんじいしきば 遊泉寺石切り場	未指定 (産業遺産)	江戸期から採掘がなされた角礫凝灰岩の採掘場。第二次大戦末期には中島飛行機(現・富士重工業)が洞窟を利用して、部品を製造。総延長10km、8000㎡に及ぶ広大な迷路空間となっている。随所に地下水が溜まり、幻想的な光景を創り出している。

⑩⑥	たきがほらいしき ば 滝ヶ原石切り場	未指定 (産業遺産)	文化11年より始まり、現在も採掘が行われる緑色凝灰岩の石切り丁場。現在稼働する石切り場と旧の石切り場があり、前者では大型の電動鋸で掘削された300m以上真っ直ぐに延びる採掘坑が、後者では藩政期から明治期に人力で掘削した採掘坑が見ることができる。
⑩⑦	かながそいしき ば 観音下石切り場	未指定 (産業遺産)	大正初期から始まり、現在も掘削が行われる浮石質凝灰岩の石切り丁場。特徴的な黄色を呈し、湿気に強くカビが生えにくい特徴が評価され、国会議事堂や甲子園ホテルなど、全国の近代建築に利用される。市内各所でも多く見られる石材で、石蔵をはじめとして石塀や門、庭の石造彫刻物などに使用される。
⑩⑧	いしくどうぐ 石工道具	未指定 (民俗資料)	滝ヶ原地区の石切り丁場で使用された石工道具。ゲンソー、各種ツルハシ、各種チョンノと、タガネ、ノミの細工道具などがあり、里山自然学校こまつ滝ヶ原にて展示している。石材の加工技術は、今も市内26件もの石材業者や名工に受け継がれている。
⑩⑨	たきがほら 滝ヶ原アーチ石橋群	市指定 (建造物)	滝ヶ原町に現存する5橋のアーチ型石橋。地元滝ヶ原石を使用した石橋で、隣接する菩提町にも1橋が残る。明治後期から昭和初期に建造されたもの。
⑩⑩	ひがし 東酒造	国登録 (建造物)	観音下石を使った昭和20年代に築造された日本酒醸造所の石蔵。5棟の石蔵が連なり建っている。
⑩⑪	しょううんどう 松雲堂	未指定 (産業遺産)	欧米向け輸出九谷焼、ジャパントクタニの中核を担った九谷焼窯元「松雲堂」をリニューアルした町家型文化施設。施設内には、観音下石と滝ヶ原石を組み合わせた石蔵と九谷焼の上絵付け窯（錦窯）が保存されており、昭和初期の小松町家の雰囲気を感じることができる。
⑩⑫	はなさかとうせきやま 花坂陶石山	未指定 (産業遺産)	1811年に本多貞吉が花坂町で陶石を発見して以降、現在に至るまで当地の陶石が再興九谷焼の主原料として用いられている。
⑩⑬	くたにやきせいどじょう 九谷焼製土場 (九谷セラミック・ ラボラトリーほか)	未指定 (産業遺産)	陶石から九谷焼陶土（坏土）を製作するまでの工程を行う工場。直径1mを超える大きな石車で陶石を破砕し、杵で衝いで不純物を取り除いた後、ふるいにかけて、沈殿、脱水を経て、九谷焼陶土を製造。九谷焼製土所は市内の2ヶ所のみで、昔ながらの工程を見学することができる。

②4	れんぼうしきのぼりがま 連房式登窯 (登窯展示館)	市指定 (建造物)	花坂陶石山に近い近世から続く九谷焼の中心地である八幡に現存する唯一の九谷焼登窯。素地焼成する本焼段階の窯で、操業状態のまま保存されており、登窯構造や型おこし成形、素地焼成等の工程を展示する。付近には九谷工房が集中する。
②5	にしきがま 錦窯 (錦窯展示館)	未指定 (産業遺産)	九谷焼の上絵付け窯で、低火度焼成窯のため、小松町家の工房内に備え付けられている。人間国宝を輩出した徳田八十吉の工房であり、現在は錦窯展示館として、初代から三代の八十吉作品を展示する。
②6	おごや 尾小屋鉱山	未指定 (産業遺産)	江戸初期に発見された鉱山で、銅の他に金・鉛・亜鉛を産出。銅は明治から大正に生産量が増大し、日本有数の産出量を誇る。昭和46年の閉山まで地域の基幹産業として支え、そのための鉄道も敷かれた。坑道跡を整備したマインロードとそれに隣接して建設された尾小屋鉱山資料館では、鉱山の歴史や鉱山道具、そして様々な鉱物が展示される。
②7	かなひらきんざん 金平金山	未指定 (産業遺産)	江戸後期に加賀藩財政を支えた金山。現地は立ち入りできないが、博物館が所蔵する当時の文献や金山絵巻は非常に貴重で市指定文化財。
②8	ゆうせんじどうざん 遊泉寺銅山	未指定 (産業遺産)	尾小屋鉱山と並ぶ大規模銅山。江戸後期に発見され、明治・大正と大規模に採掘された。現地には真吹炉が2基遺存している。
②9	なたでら 那谷寺 (本堂ほか5棟)	国重文 (建造物)	「白山之記」に白山三カ寺のひとつとされる古刹で、岩屋寺とも称される。一向一揆による戦火で荒廃したが、江戸初期、加賀前田家三代利常公が再建した。屋根には地元凝灰岩を用いた石棟が用いられ、同様の石棟構造が粟津温泉の老舗旅館「法師」にも取り入れられている。
③0	なたでらくりていえん 那谷寺庫裏庭園	国名勝 (史跡)	那谷寺再建時に造営された江戸初期の様式を持つ庭園遺構。泉水を含む主庭と書院北側の平庭および茶室「如是庵」の茶庭で構成される。園内に配される庭石や飛び石には碧玉やメノウ、水晶、オパールなどの地元産の宝石類が使用される。
③1	まえかわすいろごかんぐん 前川水路護岸群	未指定 (風景地)	南加賀に所在する3つの潟湖、加賀三湖と梯川を繋ぐ前川水路の護岸風景。前川に面する家々には、舟の出入りが可能な石蔵が連なり、水路護岸には地元石材の石組が施される。

③②	ひょうがわ いしがき 日用川の石垣	未指定 (建造物)	19世紀後半頃、地震で破損した小松城石垣を修復にきた人足が日用の有川家に逗留し構築したとの伝承が伝わる。近世末期の地元石材による護岸石垣。
③③	な でんやま 那殿山のメノウ さんしゅつち きがん 産出地と奇岩及び 周辺建物	未指定 (建造物 ・天然記念物)	懸造りの本堂(那殿観音)は昭和34年の建物。奇岩や窟(いわや)状の地形もあり、那谷寺と並び、古くからの信仰の場であった可能性が高い場所。オパール・メノウの採掘地であった歴史もある。
③④	やわた 八幡を中心とする くたにやまき とうちよう 九谷焼の陶彫 おきもの (置物)	未指定 (無形(工芸技 術)・民俗資 料)	明治3年(1870)に開窯した松原新助により、小松八幡で創始された彫陶(置物)製作技術と型。勝木作太郎など、多くの名工を生みだし、今に受け継がれている。小松九谷の特徴の一つ、「連房式登窯」と関係の深い資産。
③⑤	あたかみんねんじ 安宅愍念寺の たんころ石の擁壁	(未指定) 建造物	現本堂は、文政13年(1830)の建築で、擁壁は明治時代の造成と考えられる。たんころ石は、地元凝灰岩を削り抜いた円形の建築部材で、土止めや基礎とした。安宅町内に多く残存し、近代の石文化を示す土木遺産としても貴重。
③⑥	たきがはらいし せきざいかこう 滝ヶ原石の石材加工 ぎじゆつ 技術	(未指定) 無形 (技術)	地元滝ヶ原石による伝統的な彫刻作成技術。同石材による作品は、市内各所にあり、石切り場とともに、石文化の継承に欠かせない工芸技術。
③⑦	たき が はらはちまんじんじや 滝ヶ原八幡神社 おおとりい 大鳥居	未指定 (建造物)	地元滝ヶ原石で製作された大型の鳥居。明治23年(1890)に北海道に渡り、坂本木材合名会社を設立し財を成した坂本竹次郎氏により、昭和19年(1944)に寄贈された。
③⑧	おおみやじんじや せきば 大宮神社の石馬	未指定 (工芸品)	昭和18年(1943)に奉納された石馬。馬子とセットの石像で、国府地区に類例が比較的多くみられる。石材は滝ヶ原石とみられ、巨大な石塊を境内に運び込み、その場で彫刻された。
③⑨	こうだじんじや へんがく 河田神社の扁額	未指定 (工芸品)	かつて河田神社の鳥居に掲げられていた大型の扁額で、龍の見事な彫刻が施される。昭和12年(1937)奉納の鳥居に掲げられていたもの。石材は滝ヶ原石で、国府地区における滝ヶ原石の広がりを示す資料。

構成文化財予定の写真一覧

①那谷・菩提・滝ヶ原碧玉産地



①滝ヶ原碧玉露头



②八日市地方遺跡出土品（製玉資料）



③八日市地方遺跡



④片山津玉造遺跡出土品



⑤河田山古墳群の石室



⑥河田山古墳群出土品



⑦十九堂山遺跡石塔群



⑧ 仏御前墓



⑫ 小松城本丸櫓台石垣



⑨ 滝ヶ原石造多層塔



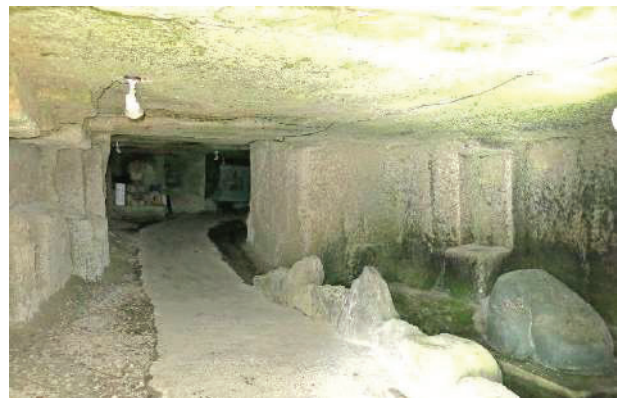
⑬ 小松城本丸西側石垣



⑩ 滝ヶ原下村八幡神社遺跡



⑭ 鶴川石切丁場 (ハニベ岩窟院)



⑪ 観音下白山神社境内遺跡



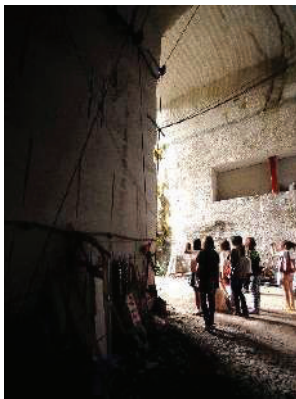
⑮ 遊泉寺石切丁場



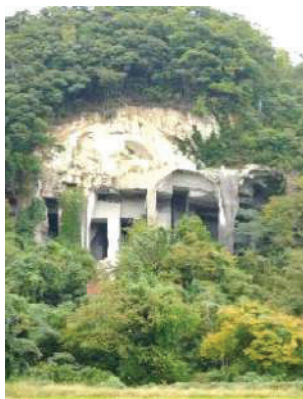
⑩滝ヶ原石切丁場



滝ヶ原石切丁場



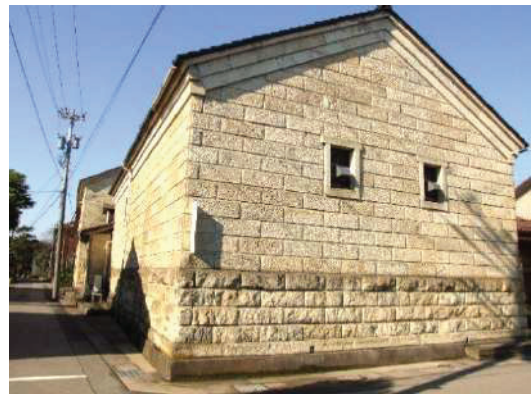
⑪観音下石切丁場



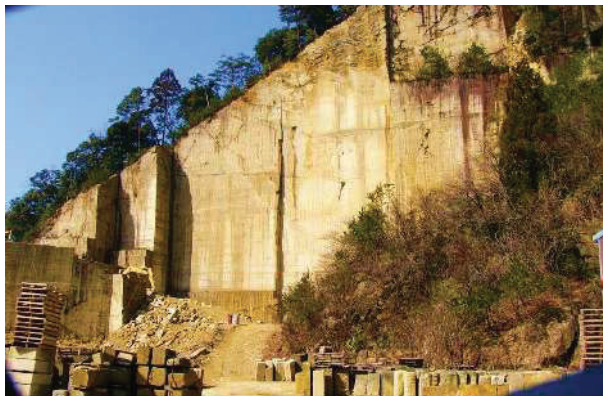
⑬滝ヶ原アーチ石橋群



⑭東酒造（石蔵）



⑮松雲堂



⑯石工道具



⑰花坂陶石山



⑳九谷焼製土場  
(九谷セラミック・ラボラトリーほか)



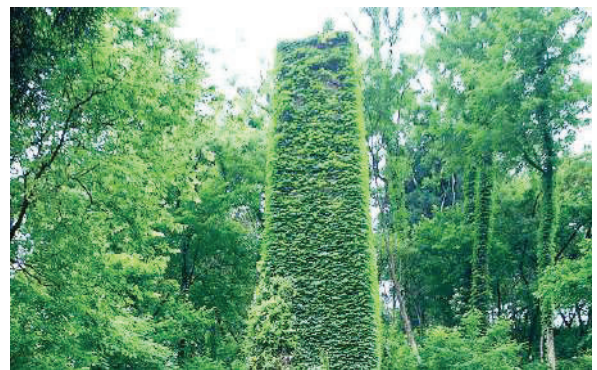
㉑金平金山



㉒連房式登窯



㉓遊泉寺銅山



㉔錦窯 (錦窯展示館)



㉕那谷寺 (本堂ほか5棟)



㉖尾小屋鉱山・尾小屋マインロード



⑩那谷寺庫裏庭園



⑭八幡を中心とする九谷焼の陶彫（置物）



⑪前川水路護岸群



⑮安宅愍念寺のたんころ石の擁壁



⑫日用川の石垣



⑯滝ヶ原石の石材加工技術



⑬那殿山のメノウ産出地と奇岩及び周辺建物



⑰滝ヶ原八幡神社大鳥居



③⑧大宮神社の石馬



③⑨河田神社の扁額



## 日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
27	『珠玉と歩む物語』小松～時の流れの中で磨き上げた石の文化～

## (1) 将来像 (ビジョン)

小松市では、市制 100 周年を節目とする 2040 年の本市の姿を 6 つの都市像に分かりやすくイメージした 2040 年ビジョンを 2023 年 11 月に策定した。各都市像は互いに関連し、それぞれが好循環をつくり出す重要なファクターとなっている。本市は、2024 年 3 月北陸新幹線小松駅開業により、新幹線駅と小松空港が近接する類まれな都市であり、新たな人流・物流が生まれるチャンスを活かし、新たなまちづくりへの挑戦を掲げている。

また、2025 年 1 月策定の「小松市ビジョン総合戦略」では、2040 年ビジョン実現のため、5 年間で集中して取り組むべき政策を設定した。総合戦略の柱となる 4 つのターゲットの 1 つである「人流・物流基盤の強化」では、自然・文化の保全・継承の活用として、文化・工芸・産業など、歴史や伝統を守り、次世代に継承を挙げている。これら上位計画との整合性を図りながら 2 つの将来像を示す。

## ○世界に時めく日本海側の拠点都市こまつ

北陸の国際空港と新幹線駅を有する小松市は、日本遺産「石の文化」の歴史が示すように、2300 年前の弥生時代から交流を通じて人々の生活が営まれ、交易と産業で発展してきたまちである。本市の、もう一つの日本遺産「北前船寄港地安宅」とも連携し、地域が持つ固有のストーリーに基づいて地域外の人々が「小松」を想起できるイメージをデザインし、交通アクセスの良さを活かした誘客を促進することで、日本海側の拠点都市を目指していく。

## ○日本遺産「石の文化」の構成文化財を活かした魅力的なまちづくり

現在、本市では、令和 7 年度の認定に向け、「文化財保存活用地域計画」の作成を進めている。計画では、日本遺産の核となる構成文化財が集積し、文化的景観が広がるとともに市民の活発な活動も見られる「那谷地区」「西尾地区」を歴史文化遺産保存活用区域に設定することとしている。那谷地区においては、那谷寺の新たな文化的価値を見出す総合調査に着手しており、西尾地区においても産業遺産として営みを伝えるエリア一体の再整備に向けた基本構想の策定を進めている。これら、農山村エリアに位置する 2 地区の構成文化財を、重点的に文化観光資源として磨き上げ、守り、次世代に継承すること取り組みは持続可能な文化観光資源となり、高付加価値化による観光収益を文化財保護に活かす好循環につなげていく。

また中心市街地においては、北陸新幹線小松駅開業に先行して小松駅高架下にオープンした観光交流センター「Komatsu 九」内に日本遺産発信のゲートウェイとなるギャラリー機能を整備した。また、旧小松城三の丸跡に位置する芦城公園には、市制 90 周年となる 2030 年開館を目指す「未来型図書館等複合施設」において、博物館機能の導入を計画しているところであり、市内の日本遺産関連施設をつなぎ情報発信の拠点とすべく、本年 3 月

末の基本計画の策定を予定している。

核となる中心市街地と農山村エリアの拠点施設を結び、市一体となった取り組みを行うことで、新たな人流を創出し、好循環を生む魅力的なまちづくりを目指していく。

(2) 地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-A：石の文化拠点施設への来館者数

年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	139,556	178,158	202,505 (集計中)			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	206,000	210,000	214,000	218,000	222,000	226,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	石の文化拠点施設の来館者数合計の増減により把握。2024年を基準とし、毎年度、対前年比で2.0%の伸び率の達成を設定。					

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-B：石の文化拠点施設への回遊率

年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	—	—	12.2% (集計中)			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	14.2%	16.2%	18.2%	20.2%	22.2%	24.2%
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	拠点施設のうち、小松の石文化のゲートウェイと位置付けている観光交流センター「Komatsu 九」(2023年9月オープン)への集客に対する他施設の平均値との割合で回遊者の増減を把握。毎年度、対前年比で2.0%の伸び率の達成を設定。					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②－A：アンケート調査による「石の文化」を誇りに思う人の割合						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	179%	延期	実施予定			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	175%	180%	185%	190%	195%	200%
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		アンケート調査により石の文化に誇りを感じると回答した住民の割合。2017年を100%とした指標で毎年5%増を見込む。				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：九谷セラミック・ラボラトリーの入館者数						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	7,199	5,737	4,283 (集計中)			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	6,300	6,900	7,500	8,200	9,000	9,900
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		石の文化ストーリーを体感できる施設で、体験料金が主たる収入であり、入館者増と収支が比例する。今年度より九谷セラミック・ラボラトリーでは、窯元組合により KUTANI BASE など利用促進が図られている。2023年を基準に2025年は約10%回復、以降は前年比10%を見込む。				

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：日本遺産の構成文化財がき損滅失していない割合						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	100	100	100			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	100	100	100	100	100	100

指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成文化財が見学可能な状態で残存している割合。
---------------------	-------------------------

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：地域の外国人宿泊者数						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	1,200	6,476	5,571			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	6,100	6,700	7,300	8,000	8,800	9,600
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	外国人観光客は、構成文化財那谷寺に多く訪れており、宿泊する割合が高いため、経済効果の指標とする。市内宿泊施設からの報告数で、2024年を基準に2025年は10%回復を見込む。2026年以降は毎年度、対前年比で10%の伸び率の達成を設定。					

(3) 地域活性化のための取組の概要
<p>◆本計画の基本的な方針</p> <p>これまで市内に分布する構成文化財を面で結びつけて「小松まるごとストーンミュージアム」と位置づけ、観光インフラや学びの拠点として常設展示施設を整備するとともに、地域住民による新たな文化資源の掘り下げや、地域活性化団体による受け入れ体制整備などを行ってきた。2024年9月、「石の文化」の原点・八日市地方遺跡が存する小松駅高架下に、北陸新幹線開業に合わせて小松市観光交流センター「Komatsu 九」が完成した。小松市観光交流センター「Komatsu 九」ギャラリーには、構成文化財の八日市地方遺跡出土品を展示。小松の石文化紹介ブースを設け、日本遺産のガイダンス機能を持たせた中核施設とし点在する文化拠点へと結び付けるものとする。</p> <p>市制90周年にあたる2030年は、中心市街地に位置する芦城公園に図書館機能や博物館機能、交流・活動を支える多面的な機能を備える「未来型図書館等複合施設」の整備が予定されている。本施設は、博物館機能を中心に、日本遺産「石の文化」を中心とする「ものづくりと交流」の歴史や文化を、ものがたりの視点として市民と共に編集・発信していく。また、芦城公園周辺に新たな人流を生み出し、都市機能の集積が進む小松駅周辺との回遊性の創出によるエリア全体の価値の向上を目指すことで、構成文化財の保存・活用につなげる。</p> <p>特に、「石の文化」は、九谷焼や石材産業など「ものづくり」文化を重要な側面の一つとして捉えている。国内外に向けた情報発信による認知度向上は、誘客効果のみでなく生業の需要拡大にもつながっている。九谷セラミック・ラボラトリーなどの拠点施設や「GEMBAプロジェクト」を通じた発信を続け、新たなビジネスチャンスを掴むとともに「ものづくり産業」の継承発展や産業観光の自走化につなげていく。</p>

#### (4) 実施体制

※会員企業と石の文化推進事業を実施  
(旅行商品、土産品開発・販売等)  
SAVOR JAPAN・産業観光連携事業の推進

協議会：(一社)こまつ観光物産  
ネットワーク(地域 DMO)

指導・助言

地域おこし企業人(HIS 出向)

養成

こまつ観光ボランティアガイド「ようこそ」

※各団体間の連携・支援・マネジメント

行政：小松市

観光交流機能担当リーダー

委託

地域力総合アドバイザー

指導・助言

協働

大学：公立小松大学

連携

学び・活性化連携

⑧産業観光(ものづくり観光)を推進

産業団体

小松ものづくり未来塾

小松商工会議所

こまつ KUTANI 未来のカタチ実行委員会

⑨拠点施設(セラボ、製土工場、陶石

石川県九谷窯元工業協同組合

小松九谷工業協同組合

※石の文化の産業振興、産業観光を推進

地域団体

①拠点地域(遊泉寺銅山等)

鶴遊立活性化委員会

②拠点地域(尾小屋鉱山跡等)

西尾地区活性化推進会議

③拠点地域(滝ヶ原石切り場等)

滝ヶ原自然学校

④拠点地域(滝ヶ原カフェ等運営)

滝ヶ原ファーム

⑤拠点地域(観音下石切り場等)

観音下石の保存会

⑥拠点地域(里川石の石造物等)

国府地区地域協議会

⑦拠点施設(石の名勝地)

宗教法人那谷寺

※拠点地域での地域活性化を担う、今後も随時増加

指導・助言

学び・活性化連携

#### [人材育成・確保の方針]

総合プロデューサー的役割を果たす人材については、協議会(地域 DMO)にいる地域おこし企業人や、観光交流センターを拠点に活動する観光交流機能担当リーダーらの優れた民間のノウハウを活かし、長期的に関わる人材を育成していく。また、地域団体の代表やこまつ KUTANI 未来のカタチ実行委員会及び小松ものづくり未来塾の代表などキープレイヤーとも連携し、地域力総合アドバイザーの指導・助言を得ながら育成・確保を図る。

地域プレイヤーについては、観光ボランティアガイドの養成を継続し、地域ガイドの質の向上を図る。さらに、北陸新幹線小松駅開業を契機とした更なる交流人口の拡大を図り、日本遺産の裾野を拡大していく。

学校教育では、他地域との「石の文化」連携授業による学び合いを継続するとともに、各小学校と地元構成文化財との関りを深めていき、語り部としての活動や新しい「石の文化」の提案など、実践的なものとしていく。中高生には、アーティストインレジデンスを通じたワークショップを切り口に石の文化や世界に目を向けた人材育成に取り組む。大学連携では、地元公立小松大学を中心に、これまでの拠点地域での地域活性化ゼミ活動を継続するとともに、石材や地質など学術調査のフィールドとしても開放し、将来的な担い手や関係人口(応援団)の拡大に努めていく。

#### (5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

2021年度の日本遺産サミット開催を契機として、協議会である（一社）こまつ観光物産ネットワークや地元地域団体、「こまつものづくり未来塾」など産業団体の代表者らによる実行委員会を組織した。また2025年認定予定の小松市文化財保存活用地域計画では、保存活用地域に構成文化財が密集する「那谷地区」「西尾地区」を選定している。本計画の実施にかかる文化財保存活用協議会では、地域住民や産業団体との連携を図りながら構成文化財の保存・活用を図る組織として結成を検討している。さらに、物販業者や観光業者が組織の中核である協議会との連携強化を図ることで、相乗効果による自立・自走化に取り組んでいく。

資金確保については、既に取り組んでいる地域や業界で稼ぐ仕組みを継続し、全体の消費額を向上させていく。滝ヶ原地区では、既に石の里のガイド事業を地元で行っており、その料金を草刈り等、維持管理費に充てている。また、石切り場の風景や里山の農村風景を活かし、民間がカフェや滞在型宿泊体験施設を運営しており、国内外から利用者が訪れている。他の拠点地域でも、民間による宿泊施設やレストランが整備される地域があり、ワーケーションなどの滞在型プランと連携し、新たな付加価値を高め、地区内で消費される仕組みの構築やガイドを有料化するなどの取り組みを推進する。

ものづくり産業では、産業観光「GEMBA プロジェクト」を推進し、参加企業の増加やプログラムの通年販売など、恒常的な収入を目指す。加えて、メディアへの露出や情報発信の取り組みを継続し、本来の産業としての利用拡大につなげ、生業を維持していく。九谷焼産業でも、九谷セラミック・ラボラトリーを拠点に、体験事業や新商品開発、物販事業を強化し、運営資金を確保していく。

協議会本体である（一社）こまつ観光物産ネットワークは独立した法人であり、今後、着地型旅行商品のプロモーションなど観光事業を通して旅行客の増加を図ることで、駅や空港の直営店での販売増につなげ、収入の安定化につながる。また、ふるさと納税の返礼品に会員の商品を提案・納入することで業界全体の売り上げ増をもたらす。また、日本遺産の魅力を発信することがふるさと納税制度の「地域の宝」活用コースの増収につながり、さらに構成文化財である九谷焼の返礼品が増えることで、九谷焼業界も潤う好循環を生みだしていく。

協議会を起点に、地域団体及び産業団体の取り組みがつながり、好循環を生み出す仕組みづくりに取り組む。

## (6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

### 取組 1：文化財保存活用地域計画に即した構成文化財の保存・活用と整備

文化財や文化資源の保存・活用については、令和7年度認定に向け「小松市文化財保存活用地域計画」作成を進めている。計画内では、日本遺産認定の重要な構成文化財を含む2地区「那谷地区」「西尾地区」が保存活用区域として設定されている。

「那谷地区」では、滝ヶ原町における継続的な取り組みから、国指定の構成文化財を保有する那谷寺の磨き上げと高付加価値に取り組む。「西尾地区」では持続可能な地域づくりに資することを目的として資料館とメインロード改修を核に、尾小屋鉄道の動態展示場をはじめ周辺に残された旧鉱山及び鉱山町の遺構群と回遊性を持たせた基本構想策定に取り組んでいる

両エリアの構成文化財を、重点的に文化観光資源として磨き上げ、守り、次世代に継承する取り組みは持続可能な観光資源となり、高付加価値化による観光収益を文化財保護に活かす好循環を育むものである。その上で農山村エリアを中心市街地と結び、各拠点施設や地域への誘客促進については、シェアサイクルやライドシェアなど2次交通網の充実とともに進めていく。

### 取組 2：学校教育への活用と地域内への浸透促進

認定後、教育委員会と協力して副読本を作成し、市内小学校5年生全員への配布を継続して行っている。また、構成文化財である重要文化財八日市地方遺跡出土品を保存、公開活用している埋蔵文化財センターでは、弥生時代にも砥石としての利用があった石材でもある滝ヶ原石を使った滑石製の勾玉づくり体験（古代ものづくり体験）を実施し、重要文化財等を紹介する展示室では、市民に実物をみていただきながら、「こまつのものづくり」について説明を行っており、いずれも継続して実施していく予定である。

2023年には、小中学校教員における社会科研究会のプログラムにて、市内の学校における文化財の保存・活用の現況を把握するとともに、より一層の連携と取組の推進を目的としたワークショップを実施。2024年には、日本遺産構成文化財をめぐるバスツアーを実施している。こうした取り組みの中からみえてきた課題に対し、今後、自治体と学校と連携しながら、構成文化財の周知、理解に努めていく。また、遊泉寺銅山跡や滝ヶ原地区など大学連携による地域活性化や調査研究事業を継続し、幅広い年齢層への普及を図る。

### 取組 3：情報発信

新幹線開業に合わせて強化されたプレスツアーや全国メディアとのタイアップ企画などと連動し、教育旅行の誘致や「珠玉と歩む小松」を柱とした誘客プロモーションを展開する。2026年大阪・関西万博では、ローカルジャパン展にて南砺市と小松市と共同出展を予定している。双方の構成文化財（小松市：那谷寺、九谷焼、南砺市：瑞泉寺、井波彫刻）を活用した共同作品を出展することで、日本の新たな伝統工芸の取り組みを広く発信していく。今後も、共通する構成文化財を保有する自治体との連携企画等を検討し広域連携を進め、広く発信していく。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	連携強化による組織強化		
概要	各地の活性化団体などの連携強化と調整、各地の団体が維持される仕組みの確立、事業全体の総括を行う組織整備		
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会の日本遺産事業における役割明確化	協議会は、民間事業者が会員となり、収益を上げる組織であり、地域 DMO として公益事業も実施している。その中で、日本遺産事業における役割を明確化し、地域活性化事業を推進していく。	協議会 小松市
②	総合プロデューサーの確立と担い手確保	観光交流機能担当リーダー等を活用し、各団体の動きを総合的に統括する人材の確立を図り、地域プレイヤーを確保していく。	協議会 小松市
③	小松市文化財保存活用地域計画協議会による組織強化	小松市文化財保存活用地域計画協議会に地域団体、ものづくり産業団体を包括し、団体間の連絡調整や連携事業の実施等、相乗効果を図るための場として発展継承し、関係団体の連携強化を行う。	協議会 民間 小松市
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		9 団体
2023			9 団体
2024			9 団体
2025	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		10 団体
2026	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		10 団体
2027	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		11 団体
2028	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		11 団体
2029	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		12 団体
2030	日本遺産事業で連携関係にある地域・産業団体数		12 団体
事業費	2025 年度：200 千円      2026 年度：200 千円      2027 年度：200 千円		
継続に向けた事業設計	「石の文化」・「ものづくり文化」が地域のアイデンティティという認識を維持し、各団体が順調に収益をあげることが、地域及び業界の存続や地域活性化につながる仕組みづくりを行う。それにより事業を継続するとともに、効果の可視化により行政的支援の継続を行う。		
事業費	2028 年度：200 千円      2029 年度：200 千円      2030 年度：200 千円		
継続に向けた事業設計	「石の文化」・「ものづくり文化」が地域のアイデンティティという認識を維持し、各団体が順調に収益をあげることが、地域及び業界の存続や地域活性化につながる仕組みづくりを行う。それにより事業を継続するとともに、効果の可視化により行政的支援の継続を行う。		

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名	上位計画に基づいた事業展開		
概要	日本遺産の取り組みを、上位計画及び文化財保存活用地域計画に沿った事業展開を計画し、見直しや変更にも柔軟に対応する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	文化財保存活用地域計画との連動	令和7年7月認定をめざす小松市文化財保存活用地域計画では、保存活用区域に「石の文化」の核になる構成文化財が密集する2地区である「那谷地区」「西尾地区」を選定。本計画に基づいた課題—方針—措置と連動して取り組む。	小松市 専門家 民間
②	こまつ新交流ビジョン2024との連動	日本遺産「石の文化」ストーリーを活用し、地域外の方が「小松」を想起できるようなイメージデザイン、近隣の他地域との魅力と連動することで広域な誘客を狙っていく。	小松市 民間
③	構成文化財・那谷寺の新たな価値づけと磨き上げ	2024年度から3カ年計画で取り組むもので、那谷寺の文化的価値を見出す総合調査を実施する。重要文化財建造物群及び国名勝2つにおける保存修理を実施する。	小松市 民間
④	尾小屋鉱山資料館を核とした周辺持続活性化構想	構成文化財としてさらに磨きあげることが目的として、資料館とメインロードの改修を核に、周辺に残された旧鉱山町の遺構群と回遊性を持たせた構想(案)である。	小松市 民間
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		3
2023			4
2024			7
2025	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		7
2026	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		7
2027	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		7
2028	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		6
2029	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		6
2030	日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び構想の数		5
事業費	2025年度：8,300千円 2026年度：6,300千円 2027年度：5,000千円		
継続に向けた事業設計	上位計画や観光、文化財の長期計画に位置付けることで、日本遺産の取り組み及び構成文化財を永続的にすることが可能となる。		
事業費	2028年度：5,000千円 2029年度：5,000千円 2030年度：5,000千円		
継続に向けた事業設計	上位計画や観光、文化財の長期計画に位置付けることで、日本遺産の取り組み及び構成文化財を永続的にすることが可能となる。		

(7) - 3 人材育成

## (事業番号3-A)

事業名	現基盤を活かした人材の育成と確保		
概要	日本遺産に関わる人材の育成及び能力向上と、関連の深い産業の発展を図り、新たなプロジェクトリーダーや事業の継続・担い手を確保する		
	取組名	取組内容	実施主体
①	観光交流機能担当リーダー等との連携と協働	新幹線駅の観光交流施設を活かすため採用された高度なスキルを持つ人材の指導や助言を得ながら、日本遺産を活用する人材のスキルアップを図る。	協議会 小松市
②	観光ガイド育成継続	観光ガイドの新規募集、養成講座、研修会を継続して行い、ガイド人材の確保及び育成を行う。登録されたガイドは、市及び協議会、日本観光振興協会、南加賀商工観光推進協議会のHPで告知、協議会HPを介して予約・派遣を行う。将来的には、新幹線開業に合わせ整備する観光交流センターでの運用を図っていく	協議会 小松市
③	ものづくり産業継承者の支援	「石の文化」による地域の発展には、石材業や九谷焼など伝統産業の発展・継続が必要不可欠である。技能継承支援制度や地域産材利用促進制度を継続し、活用人材だけでなく担い手の確保を行い、両面での活性化を行っていく。	小松市
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産をガイドする人材の数		60人
2023			61人
2024			62人
2025	日本遺産をガイドする人材の数		65人
2026	日本遺産をガイドする人材の数		70人
2027	日本遺産をガイドする人材の数		75人
2028	日本遺産をガイドする人材の数		80人
2029	日本遺産をガイドする人材の数		85人
2030	日本遺産をガイドする人材の数		90人
事業費	2025年度：8,100千円 2026年度：8,100千円 2027年度：8,100千円		
継続に向けた事業設計	新幹線開業と同時に、観光振興や地域活性化、伝統産業の振興に長けた民間人材が登用された。彼らと連携し指導を受け、そのノウハウを吸収していくことで、地元で継続的活動できる人材が育成される。 なお、伝統産業については、行政による下支えを行っていく事項であり公費財源を充てていく。		
事業費	2028年度：8,100千円 2029年度：8,100千円 2030年度：8,100千円		

継続に向けた 事業設計	新幹線開業と同時に、観光振興や地域活性化、伝統産業の振興に長けた民間人材が登用された。彼らと連携し指導を受け、そのノウハウを吸収していくことで、地元で継続的活動できる人材が育成される。 なお、伝統産業については、行政による下支えを行っていく事項であり公費財源を充てていく。
----------------	---

(7) - 4 整備			
(事業番号 4 - A)			
事業名	新幹線開業後の人流・物流基盤の強化		
概要	2024 年の新幹線開業後、農山村エリアと中心市街地を結ぶ拠点施設を整備することで、新幹線開業後の人流・物流基盤の強化を図る。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	未来型図書館等複合施設の整備	中心市街地である小松城内芦城公園周辺の公共施設マネジメント事業と一体となった総合プロジェクト。2030 年の完成をめざし、博物館と図書館機能の融合を実現するための持続的プロジェクトとして、「ものがたり」と「ものづくり」を編み続けることを目指す。	小松市
②	構成文化財・那谷寺の新たな価値づけと磨き上げ	2024 年度から 3 カ年計画で取り組むもので、貴重な文化財として守り伝え、持続可能な観光資源とするために高付加価値化による観光収益を文化財保護に活かす好循環を育むものとし、重要文化財建造物群及び国名勝 2 つにおける保存修理を実施する。	小松市 民間
③	尾小屋鉱山資料館を核とした周辺持続活性化	資料館とメインロードの改修を核に、周辺に残された旧鉱山町の遺構群と回遊性を持たせたもの。	小松市 石川県
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			139,556
2023	石の文化拠点施設への入館者		178,158
2024			202,505
2025	石の文化拠点施設への入館者		205,000
2026	石の文化拠点施設への入館者		205,000
2027	石の文化拠点施設への入館者		205,000
2028	石の文化拠点施設への入館者		210,000
2029	石の文化拠点施設への入館者		210,000
2030	石の文化拠点施設への入館者		250,000
事業費	2025 年度：111,268 千円 2026 年度：689,864 千円 2027 年度：3,431,211 千円		
継続に向けた事業設計	小松市が 2024 年に北陸新幹線の開業を迎え、小松駅に小松市観光交流センター（Komatsu 九）が完成した。Komatsu 九を起点に構成文化財の核である那谷地区の取り組みを結び周辺施設とも連携したにぎわい創出を図る。		
事業費	2028 年度：2,036,000 千円 2029 年度：2,036,000 千円 2030 年度：2,028,000 千円		
継続に向けた事業設計	Komatsu 九を起点に周辺地域や芦城公園周辺の未来型図書館等複合施設をはじめとする文化施設とも連携したにぎわい創出を図ることで、一体的な好循環をめざす。		

## (7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

事業名	ストーリー体験コンテンツの造成		
概要	地元主催のツアーやイベントから、産業観光や九谷焼体験に加え、総合的に体験する着地型旅行商品など、各階層に希求するストーリー体験を提供する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	拠点地域での継続型イベントや受け入れ態勢の強化	滝ヶ原地区の石切り場や石橋見学ツアー、石工体験、里山ステイ、観音下地区の石切り場やアート作品見学、尾小屋鉱山跡や鉱山町巡り、遊泉寺銅山跡のトレッキングなど、地域イベントの質を高め、構成文化財の体感機会を提供する。	民間
②	産業観光の推進（GEMBAプロジェクトの推進と発展）	工場の受け入れ環境、団体・教育旅行の受け入れ体制、モデルコースを整備し、日本遺産ものづくり現場を体感する産業観光の継続開催を行う。発信はHPやチラシ、メディアを活用し、整備済みの予約や事前決済システムを通して提供。	民間 小松市
③	九谷焼の体験商品販売と消費拡大	ストーリーを体感できる九谷セラミック・ラボラトリーの入館者を増やし、九谷焼の絵付けや成形体験、物販の強化を図る。発信・予約は、施設HP、じゃらんやSow experienceで実施。	民間
④	着地型旅行商品のプロモーション	①～③やSAVORJAPAN認定とも連携し、地域おこし企業人（HIS派遣）の協力を得ながら、着地型旅行商品の開発、プロモーションを行う。商品の予約・販売は、会員企業である旅行会社が主体となっており、大手旅行社とタイアップも図る。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	セラボクタニ体験者人数（有料）		2,181
2023			2,417
2024			2,424
2025	セラボクタニ体験者人数（有料）		2,500
2026	セラボクタニ体験者人数（有料）		2,600
2027	セラボクタニ体験者人数（有料）		2,600
2028	セラボクタニ体験者人数（有料）		3,000
2029	セラボクタニ体験者人数（有料）		3,000
2030	セラボクタニ体験者人数（有料）		3,000
事業費	2025年度：29,225千円 2026年度：29,225千円 2027年度：29,225千円		
継続に向けた事業設計	旅行商品の開発には地元旅行会社とHISからの派遣社員、産業観光は日本観光振興協会の指導、九谷焼体験は作家が直接指導するなど、専門家による指導の下、内容を磨き上げて商品価値を高めている。体制整備など初期投資は行政が支援するが、ランニングは自走化を目指していく。		

事業費	2028年度：29,225千円 2029年度：29,225千円 2030年度：29,225千円
継続に向けた事業設計	旅行商品の開発には地元旅行会社とHISからの派遣社員、産業観光は日本観光振興協会の指導、九谷焼体験は作家が直接指導するなど、専門家による指導の下、内容を磨き上げて商品価値を高めている。体制整備など初期投資は行政が支援するが、ランニングは自走化を目指していく。

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

事業名	教育への活用と地域内への浸透		
概要	年齢層、関心など対象に応じた情報共有を行うことで、市民への効果的な浸透をもたらし、日本遺産に関わる関係人口の拡大を図る。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	小中学校と連携した普及啓発	教員向けの講習を行い、副読本など教材を活用した構成文化財を紹介する体験学習や、埋蔵文化財センターにおける学習体験を実施	小松市民間
②	構成文化財を活用した新商品開発	地元中学校、高校による地区内の構成文化財を活用した商品開発	小松市民間
③	大学連携事業の継続	既に連携事業を展開する公立小松大学をはじめとした近隣の大学との連携による構成文化財を活かした地域活性化	小松市 専門家 民間
④	構成文化財の公開及び講座、見学会の開催	行政、所有者、市民団体との連携を強化し、文化財の公開及び講座、見学会等の開催し、構成文化財に触れる機会を増やしていく	小松市 専門家 民間
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	学習体験等による日本遺産の理解度		98.3%
2023			96.0%
2024			97.0%
2025	学習体験等による日本遺産の理解度		100%
2026	学習体験等による日本遺産の理解度		100%
2027	学習体験等による日本遺産の理解度		100%
2028	学習体験等による日本遺産の理解度		100%
2029	学習体験等による日本遺産の理解度		100%
2030	学習体験等による日本遺産の理解度		100%
事業費	2025年度：3,000千円 2026年度：3,000千円 2027年度：3,000千円		
継続に向けた事業設計	小・中学校の教員向けの講習を行いながら、各学校の学習活動支援に結び付けること継続的に行う。		
事業費	2028年度：2,000千円 2029年度：2,000千円 2030年度：2,000千円		
継続に向けた事業設計	幼少時からまちの資産として知ること、将来的に幅広い年齢層への浸透を図る。		

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

事業名	戦略的な情報発信		
概要	北陸新幹線開業に合わせたプロモーション強化を追い風に、市のブランドイメージとして定着させていく。また 2026 年大阪・関西万博への南砺市との共同出展などを通し、広く発信していく。合わせて地道な HP や SNS 発信の強化を行っていく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	メディアを活用した魅力発信	観光部門が実施するプレスツアー、インフルエンサープロモーション、全国メディアタイアップ企画と一緒に「石の文化」を発信、効果分析を行う。	小松市
②	2026 年大阪・関西万博への出展	ローカルジャパン展にて南砺市と小松市が共同で出展を行う。双方の構成文化財を活用しながら、広く発信していく。	小松市 南砺市 協議会
③	各ホームページの充実と連携、SNS 発信の強化	「石の文化」ポータルサイトと、拠点地域や施設の HP、SNS アカウントに容易に相互アクセスできるように整備する。また、SNS 発信の強化を行い、関心のある人に確実に必要な情報提供を行う。上記により、既に各施設や地域で立ち上がったシステムの効果を上げていく。	協議会 小松市 民間
④	地域 DMO 及び SAVOR JAPAN と連携した発信	アフターコロナ後のインバウンド回復を見据えて、他省庁認定事業と連携・連動した発信事業を展開する。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	情報発信に係る関係事業費の合計金額 (誘客推進費・インバウンド推進費)		32,702 千円
2023			31,495 千円
2024			27,400 千円
2025	情報発信に係る関係事業費の合計額		30,000 千円
2026	情報発信に係る関係事業費の合計額		30,000 千円
2027	情報発信に係る関係事業費の合計額		32,000 千円
2028	情報発信に係る関係事業費の合計額		32,000 千円
2029	情報発信に係る関係事業費の合計額		33,000 千円
2030	情報発信に係る関係事業費の合計額		33,000 千円
事業費	2025 年度：30,000 千円 2026 年度：30,000 千円 2027 年度：32,000 千円		
継続に向けた事業設計	旅行商品の開発には地元旅行会社と HIS からの派遣社員、産業観光は日本観光振興協会の指導、九谷焼体験は作家が直接指導するなど、専門家による指導の下、内容を磨き上げて商品価値を高めている。体制整備など初期投資は行政が支援するが、ランニングは自走化を目指していく。		

事業費	2028年度：32,000千円　2029年度：33,000千円　2030年度：33,000千円
継続に向けた事業設計	旅行商品の開発には地元旅行会社とHISからの派遣社員、産業観光は日本観光振興協会の指導、九谷焼体験は作家が直接指導するなど、専門家による指導の下、内容を磨き上げて商品価値を高めている。体制整備など初期投資は行政が支援するが、ランニングは自走化を目指していく。